中里介山全集

第十一巻

筑摩書房

中里介山全集第十一巻
昭和四十六年六月三十日発行

著者　中里介山

発行者　竹之内静雄
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替東京四一二三

印刷　株式会社厚徳社
製本　株式会社矢島製本所

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 71711 (出版社) 4604

目次

恐山の巻（つづき）　5
農奴の巻　95
京の夢おう坂の夢の巻　259
大衆文学本質論（中谷博）　361
介山一面（竹盛天雄）　389
解題（十一）（南波武男）　410

函·装画·横山大観

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大菩薩峠

第十一巻

恐山の巻（つづき）

三十九

長浜から、琵琶湖の湖面へ向って真一文字に、一隻の小舟が乗り出しました。

舟の舳先の部分に、抜からぬ面で座を構えているのが、盲法師の、お喋り坊主の弁信であって、舟のこちらに、勢いよく櫓を押しきっているのが、宇治山田の米友であります。

これより先の一夜、胆吹の上平館から、机竜之助の影を追うて飛び出して来た宇治山田の米友が、長浜の町へ来てその姿を見失い、そうして、たずねあぐんだ末が湖岸の城跡に来て、残墨礎石の間に、一睡の夢を貪っていた宇治山田の米友であります。

胆吹の御殿から、胆吹の山上を往来していた弁信法師もまた、飄然として山を出て、この長浜の地へ向って来たのです。

米友がここへ来たのは、竜之助の影を追うて来たのであるが、弁信の来たのは、竹生島へ詣でんがためでありました。

弁信法師が竹生島へ詣でんとの希望は、今日の故ではありません。

彼は習い覚えた琵琶の秘伝の一曲を、生涯のうちに一度は竹生島の弁財天に奉納したい、というかねての希望を持っておりました。

今日は幸い、その希望を果さんとして、これから舟を借りて湖面を渡ろうとして、長浜の町から臨湖の渡しをたずねて来たのですが、そこは、勘がいいと言っても盲目のことですから、湖と陸との方角は誤りませんでしたけれども、臨湖の渡しそのものが湖岸のいずれにありやということを、たずねわずろうて、そうして、ついこの湖岸の城跡のとこ

ろまで来てしまったのです。

この湖岸の城跡というのが、そもそも名にし負う、羽柴秀吉の古城のあとなのでありました。秀吉が来るまでは今浜といったこの地が、彼が来って城を築くによって、長浜の名に改まりました。はからずここへ足を踏み込んで、弁信法師は杖を立てて、小首をかしげてしまったのは、湖岸としての感覚と、古城址としての風物が、その法然頭の中で混線したからではありません。そこで、意外にも、例の残墨破壁の中に、動物の呼吸を耳にしたからであります。

思いがけなくも、何か一種の動物があって、この残墨破壁の中で、快く昼寝の夢を貪って鼾をかいている。

それが弁信法師の頭へピンと来たものですから、杖を止めてその小首をかしげたのですが、これは、虎でもなければ兕でもありませんでした。本来、琵琶湖の湖岸には左様に猛悪な猛獣は棲んでいないのですが、そうかといって、穴熊の如きがいないという限りはない。

しかし、幸いに、穴熊でもなかったと見え、弁信が小首を傾けた瞬間に、向うがハタと眼を醒して、

「誰だい、そこへ来たのは」

と言ったのは、まごうかたなき宇治山田の米友であったのです。

紛う方なきといっても、知っているものは知っているが、知らないものは知らない。まして、弁信はまだ米友を知らず、米友はまだ弁信を知らなかったのですが、ここで初対面の二人は、存外イキの合うものがありました。

一見旧知の如しという言葉もあるが、弁信は米友を見ることができないから、一勘旧知の如しとでもいうのでしょう——こうして二人は、湖岸の古城址の間で、相対して問答をはじめました。

三十

湖岸に於ける二人の初対面の問答を、いちいち記述することは保留し、とにかく、それから間もなく二人は、こうして真一文字に舟を湖面へ向って乗り出したのです。

勢いよく、小舟の櫓を押しきっている宇治山田の米友は、櫓拍子につれて、

十七姫御が
旅に立つ
それを殿御が
聞きつけて
とまれ
とまれと……

思わず知らず、うたい慣れた鼻唄が鼻の先へ出たのですが、何としたものか、急に、ぷっつりと鼻唄を断ち切った時、そのグロテスクの面に、一脈の悲愴きわまりなき表情が浮びました。

そこで、ぷっつりと得意の鼻唄を断ち切って、悲愴きわ

まりなき表情を満面に漲らしてみたが、やがて櫓拍子は荒らかに一転換を試みて、

さっさ、押せ押せ
下関までも
押せば
湊が近くなる
さっさ、押せ押せ
それ押せ――

実に荒っぽい唄を、ぶっ切って投げ出すような調子に変りました。

唄が荒くなるにつれて、櫓拍子もまた荒くなるのです。

さっさ、押せ押せ
下関までも
押せば
湊が近くなる
さっさ、押せ押せ

以前の調子に比べると、鼻息も、櫓拍子のリズムも、まるで自暴そのもののようです。

自然、小舟の動揺も、以前よりは甚だ烈しい。しかし、抜からぬ面で舳先に安坐した弁信法師の容態というものは、それは相変らず抜からぬものであり、穏かなものであると言わなければなりません。

それからまた、湖面の波風そのものも、以前に変らず、いとも静かなものだと申さずにはおられません。

湖も、波も、人も、舟も、すべて穏かであるのに、漕ぎ手だけが突変して荒っぽいものになってしまい、

船頭かわいや
おんどの瀬戸で
こらさ
一丈五尺の
櫓がしわる
さっさ、押せ押せ
下関までも
さっさ、押せ押せ
さっさ、押せ押せ

そのたびに、櫓拍子が荒れるし、舟が動揺する。最初に、十七姫御が……と言って、古城の岸から漕ぎ出された時は、漕ぎ出されたというよりも寧ろ、辷り出したような滑らかさで、櫓拍子もいと穏かなものでありましたのに、この鼻唄が半ば過ぎると急に、序破急が乱れ出し、唄が変ると共に呼吸が荒くなり、櫓拍子がかわり、舟が動揺し出しました。

舟というものは、風と波とに弄ばれることはあるが、風も波も静かなのに、人間が波瀾を起して、現在その身を托している舟そのものを弄ぼうということはあり得ないことですから、その動揺の烈しさにつれて、さすがの弁信法師も、つい堪りかねたと見えて、

「米友さん――どうしました、舟の漕ぎ方が少し荒いようですね」

さりとて、弁信も特に狼狽仰天して、これを言ったのではありません。相変らず舟の一方に安坐して、抜からぬ面で言いました。

三十一

そこで、はじめて気がついたように米友が、

「うーん、そうだったか」

と言って、自暴でこめていた櫓の力を抜きますと、弁信が、

「ずいぶん、漕ぎ方が荒かったでございます、どうしたのですか、米友さん、わたくしはどうもそれがおかしいと思って、今まで、ひとりで考えてみました、最初この舟が、あの城あとの前から出る時は、ほんとうに穏かに辷り出しました、その舟の辷り出す途端から、米友さんが櫓を押す呼吸も穏かなものでございましたのに――そこで、米友さんも自然に鼻唄が出てまいりましたね、水も、波も、舟も、櫓も、ぴったりと調子が揃っておりました、そこで、その調子に乗って、おのづから呼吸が唄となって現われた米友さんの心持も素直なものでございました。わたしはそのときに別なことをこの頭で考えておりましたが、米友さんの唄が、あんまりいい気持でうたい出されたものでございますから、うっかりそれに聞き惚れてしまいました。何と言いましたかね、あの唄は……十七姫御が旅に立つ、それを殿御が聞きつけて……おもしろい唄ですね、罪のない唄ですね、それを米友さんがいい心持でうたい出したものですから、わたくしも、つい、いい心持にさせられてしまいましたのです。あなたの音声に聞き惚れたのではございません、その調子がととのっておりました、米友さんの唄いぶりもおのづから練れておりました。あの唄は米友さんが長い間うたい慣れた唄に相違ありません、よく練れていました、気分がしっくりとしていました。関雎は楽しんで淫せず、と古人のお言葉にありますが、大雅の声というものが、あれなんだろうと思われました、太古の民が地を打って歌い、帝力何ぞ我にあらん、と言った泰平の気分があの唄なんだろうと、わたくしは実に感心して聞き惚れていましたのに、それが半ばからすっかり壊れてしまいました。どうしてあんなに壊れたでしょう、あれほど泰平雍和の調子が、途中で破れると、すべてが一変してしまいました、あなたの唄が変り、櫓拍子が変り、呼吸が変り、従って舟の動揺が全く変ってしまったのには、わたくしは驚いてしまいました。そうかといって、波風がまた荒くなったのではありません、湖の水流に変化が起ったわけでもありません、前に何か大魚が現われたという気配もございませんし、後ろから何物かが追いかけて来るような空気もございませんのに、ただ、米友さん、あなただけが、荒れ出してしまい、それから後のあなたの舟の漕ぎっぷりというものが、まるで無茶ですね、無茶と言えなければ自暴ですね。さっさ押せ押せ、と言いながら、そうして自暴に漕ぎ出してからのお前さんは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いったい、この舟をどこまで漕ぎつけるつもりなのですか。下関といえば内海の果てでございます、それから玄海灘へ出ますと、もう波濤山の如き大海原なんでございますよ。ここは近江の国の琵琶の湖、日本第一の大湖でございますが、行方も知らぬ八重の潮路とは違います、それだのに、米友さん、お前さんの、今のその漕ぎっぷりを見ていると、本当に下関まで、この舟を漕ぎつけて行く呼吸でした。下関までではございません、玄海灘――渤海の波――天の涯、地の角までこの舟を漕ぎかける勢いでございました」

百三十二

お喋り坊主の弁信法師は、一気にこれだけのことを米友に向ってまくし立てたが、その間も安然として舳先に坐って、いささかも動揺の色はありません。

こちらは、いささか櫓拍子をゆるめた宇治山田の米友は、呆れ面に弁信の面を見詰めていましたが、ちょっとお喋りの呼吸の隙を見て、

「よく、喋る人だなあ、お前さんという人は……」

と言いました。

米友は、お喋りが即ち弁信であり、弁信が即ちお喋りであることを、まだよく知らないから、一気にまくし立てられて呆れ返るばかりでありましたが、弁信の減らず口はまだ続きました。

「ねえ、米友さん、この舟は、下関や玄海灘へ漕ぎつけていただくのではございません、ほんの、この目と鼻の先の、竹生島まで渡していただけばそれでよいのです、そのことは米友さんもよく御承知の上で、わたくしが、さいぜんあの城跡のところで、わたくしの希望を申し述べますと、あなたが急に勇み立って、よし、そういうわけなら、おいらがひとつ舟を漕いで渡して行ってやる、なあに、三里や五里の間、一押しだい、と言って、特にこのわたくしを小舟で、竹生島まで送って下さるという頼もしいお言葉でございましたから、わたくしは、これぞまことに渡りに舟の思いを致さずにはおられませんでしたのでございます。仏の教えでは『到彼岸』ということを申しまして、人を救うてこちらからあちらの岸に渡すのを舟に譬えてございます、善巧方便を以て弘誓の舟にたとえているのでございます、般若波羅蜜多は即ちこの到彼岸の大誓願の真言なのでございます。日蓮上人の御歌にも、ここに人を渡し果てんとせしほどに、我が身はもとのままの継橋というのがございまして、人を度して自ら度せずというのが、またこれ菩薩の本願なのでございます。生々の父母、世々の兄弟のことごとく成仏して而して後に我れ成仏せん、もし一人を残さば、われ成仏せずと、地蔵菩薩もお誓いになりました。極楽の御法の舟に乗りたくば、胸の塵をばよっく鎮めよ、と御詠歌の歌にもございます。すべて舟というものはめでたいものでございますが、特に到彼岸の意味に用いられます場合

に、果報この上もなくめでたいのでございます。わたくしの竹生島詣では、多年の誓願の一つでございまして、今日という日に、はからずもその誓願を果すの機縁をめぐまれました。長浜から竹生島までは、僅かに三里の舟路でございますが、目かいの見えぬわたくしと致しましては、多少の不安もございますので、湖岸の臨湖の渡しというのをたずねてまいりましたのですが、はからずもあなたという人にめぐり会ってみますると、うん、それなら、おいらが舟を漕いで渡してやる、お前のそういう結構な願がけから起ったんならば、おいらが舟を漕いで渡してやる、二里や三里は一押しだい！　とおっしゃられた時は、わたくしは魂が天外に飛びましたのでございます。これぞ竹生島の弁財天が、特にわたくしのために金剛童子をお遣わし下されて、数ならぬわたくしの琵琶をお聴きになりたいとの御所望――こうまで先走っておりましたのに、半ばにして音声が変りましたねえ」

三十三

「ごらんなさい、米友さん、あなたが、あそこでちょっと気が変ったばっかりに、この通り舟の方向が、すっかり変ってしまいました。毫釐も差あれば天地はるかに隔たるとは、まことにこの通りでございます」

米友はその時、櫓を休めて、眼をまるくして弁信の面を見ていましたが、

「なんと、お前という人はよく喋る人だなあ――ひとり合点で、ちんぷんかんぷんを言ったって、おいらには分らねえ」

と怒鳴りました。

けれど弁信は少しもひるまず、

「米友さんや、わたくしは一昨晩――胆吹山へ参詣をいたしましたのです、その時に、あの一本松のところで、山住みの翁に逢いました。たいへん、あそこは景色のよいところだそうでございましてね、翁は隙があるとあの一本松のところへ来ては、湖の面をながめることを何よりの楽しみといたしまして、ことに夕暮の風景などは、得も言われないと賞めておりましたが、その時にわたくしが、わたくしの眼ではその美しい風景も見ることができませんが、そんな美しい琵琶の湖にも、波風の立つことがございますかと聞きますと、それはあるとも、ここは胆吹の山だが、湖をさし挟んであちらに比良ケ岳というのが聳えている、胆吹の山も風雪の多い山ではあるが、湖に対してはそんなに暴風を送らないけれども、あちらの比良ケ岳ときては、雪を戴いた山の風情がとても美しいくせに、湖にとってはなかなかの難物でございますって――それと申しますのは、若狭湾の方の低い山々から吹き送られてまいりますところの北西の風が、ことのほかにたくさんの雪を齎し来るのだそうでございます、そうして、あちらの日本海の方から参ります

る雪という雪が、みんな比良ケ岳の山に積ってしまうのだそうでございます、それで、そのわりに雨というものが少ないものでございますから、雪の解けることがなかなか遅いそうでございまして、冬から春さきにかけますと、沿岸の平地の方は温かになりますのに、山中及び山上は、甚だ冷たいものでございますから、そこで温気と寒気との相尅が出来まして、二つの気流が烈しく交流をいたしますものですから、それが寒風となって琵琶の湖水に送られる時が、たまらないのだそうでございます。波風は荒れ、舟は難船いたし、人も災を蒙ることが多いのだそうでございます。そこで、この時分を、比良八荒と申しまして、事に慣れた漁師でさえも、出舟を慎しむのだそうでございます。藤井竹外という先生の詩に『雪は白し比良山の一角　春風なほ未だ江州に到らず』とございました、あの詩だけを承っておりますと、いかにも比良ケ岳の雪は美しいものとばかり思われますけれども、そういう荒い風を送るということを、わたくしは一昨日、胆吹の山住みの翁から承ったのでございますが、ちょうど今はまだ冬季に入っておりませんし、比良山にも雪がございませんそうですから、舟はどこまで行っても安心だそうでございます。ですから、外から起る波風の点におきましては、大安心のようなものでございますけれども、米友さんの胸の中に、波風が起ったばっかりに、舟がこの通り行方をあやまってしまいました、この舟で、この方向へ漕いでまいりましては、決して私共の心願のある竹生島へ着くことはできませんでございます」

三十四

弁信が、さかしら立って、息もつかずまくし立てるので、さすがの米友も啖呵を打込む隙がないのです。

「ねえ、米友さんや、さきほどもわたくしが、あなたに向って申しました、毫釐も差あれば天地遙かに隔たると申しました。それです、長浜の岸を出た時のあの調子で参りますると、舟は無事円満に竹生島へ着くことができたのです、それが途中でこんなに方向がそれてしまいましたのは、水が悪いわけではなく、また舟のせいでも、櫓のせいでもございませんのです、米友さんの心持一つなのです。なぜといって、ごらんなさい、あのとき米友さんが、いい御機嫌で鼻唄をうたい出しになりましたね、それ、十七姫御が旅に立つ、それを殿御が聞きつけて、とまれとまれと袖を引く……ずいぶんおもしろい唄で、無邪気なものでございましたが、それを唄い出しているうちに、米友さんの気持が急に変ってしまいました、その変ったことがわたくしの勘にはありありと分ったのです。あれを唄いかけて、あのところまで来ますと、何か昔のことを思い出したのに違いありません、たとえば故郷の山河が眼の前に現われて来たとか、幼な馴染の面影が前に現われたとかいうようなわけで、何かたまらない昔の思い出のために、米友さんは、あんなに

急に気が荒くなってしまって、さっさ押せ押せ、下関までも、と自暴に漕ぎ出してしまったのです、それに違いありません。それがあんまり変ですから、わたくしもこの頭の中で、米友さんの胸の中を、あれかこれかと想像しているうちに、おぞましや、自分も自分のつとめを忘れてしまいました。あなたに舟を漕いでいただいて、わたくしが水先案内をつとめねばならぬ役廻りでした、それを一時、わたくしはすっかり忘れてしまったのです。眼の見えないわたくしが、水先案内を致すというのも変なものでございますが、眼は見えませんでも、私には勘というものがございまして、天にはお天道様というものもございます、このお天道様のお光と、この頭の中の勘というものとを照し合わせてみますると、方角というものはおおよそわかるものでございます。ですから、これはやっぱりわたくしが悪いのでございました、責任がわたくしにあるのでございました、米友さんはただ舟を漕いでいただけばよいのでございました、右とか、左とか、取り梶とか、おも梶とかいうことは、その時々刻々、わたくしが言わなければならないのを忘りました、それ故に舟の方向をあやまらせてしまったのは、米友さんが悪いのぢゃありません、案内役のわたくしが悪かったのです、米友さんの胸の中を考えるために、私がよけいな頭を使って、舟の方がお留守になりました、それ故ほんの一瞬の差で、舟の全針路を誤らせてしまいました。わたくしたちは全く別な心で出直さなければなりません、そうでございませんと、湖とは申せ日本第一の大湖、周囲は七十里に余ると承りました、迷えば方寸も千里と申します、まして やこの七十里の湖の中で、二人は迷わなければなりません。米友さん、少しの間、舟を漕ぐことを止めていただきましょう、そうして、ゆっくり、わたくしがこの頭で考え直します、そうして、全く心を置き換えて、再び舟出をし直さなければ、竹生島へはまいれませんのでございます」

三十五

米友が、ついに堪りかねて、憤然として弁信のお喋りの中へ楔を打込みました。

「わからねえ、わからねえ、お前の言うことは一切合財、ちんぷんかんぷんで、早口で、聞き間に合わねえが、つまり、舟の行先が間違ったというんだろう、なあに、間違やしねえよ、爪先の向いた方へ真直ぐに漕いで来たんだ」

「それが、米友さん、自分は真直ぐなつもりでも、出発点というものが誤ると、その真直ぐが取返しのつかない道へ突っかけるものなのです、竹生島へ参りますには、戌亥へ向いて参らなければならないのに、この舟はいま未申の方へ向いて進んでいるのです、これでは竹生島へ着きません」

米友は櫓の手を止めて、弁信の言葉にはあんまり耳を傾けず、渺々たるみずうみの四辺をグルグル見廻しておりましたが、急に威勢のはずんだ声を出して、

「待ちな――」
と言いました。
「待ちな、弁信さん、お前さっきから目も見えねえくせに、方角が違うの、この分では島へ着けないのと、ひとりぎめでやきもき言っているが、論より証拠だ、見な、島が見えるよ、つい、その鼻の先に、立派な島が浮いてるよ」
「えッ――島がありますか」
「見な――と言ってもお前にゃ、見えねえんだな、おいらのこの眼で見て間違えがねえ、そら、ちゃんと、この指の先に島があらあ」
米友が指さす前には、たしかに蓬萊に似たような島が浮んでいることは間違いがないのです。それは雲の影とあやまるにはあまりに晴天であり、陸岸の一部と見るには輪郭が鮮かに過ぎる――指さす目的物は見えないが、弁信が全く小首を傾げてしまいました。それは、今まで信じ切った自分の勘というものに自信が持てない。そういうはずはない。眼で見ることには見誤りがあっても、勘で行くことには誤りがないと、自ら信じて疑わない弁信法師が、この場合、正直な米友から、明白にこう証言されてみると、それをも疑う余地はないのです。
自分の勘によると、この舟は全く針路を誤ってしまったから、このままでは目的の竹生島へは行けないのみか、かえって全くそれと相反れた方面へ進んでしまう――と信じ切っていたのに、眼前に島が現われた時間からいえば、まさに竹生島に到着してもよい時間になっている。そうして、両眼の明らかな、心術の正直な同行の人が、現物を指して、島があるというのだから、弁信が考え込まざるを得なくなったので、
「米友さん、違やしませんか、もしやそれは、水の上や海岸に起りがちな蜃気楼というものではありませんか――そちらの方に竹生島があるとは、どうしても考えられません」
それをも米友は、頑として受けつけないで言いました、
「蜃気楼なら、おいらも伊勢の海にいて知っているよ、あんな竜宮城とは違うんだ、そら、あの通り岩で出来て、木の生えた島が浮いている」
「では、やっぱり、竹生島でございましょうかしら、いつのまにか舟が北をめぐって、そうして竹生島の裏へ出たのかもしれません、そういうはずはありません、断じてありませんが、事実が証明する上は仕方ございません、わたくしの勘のあやまちでございましたか、或いは出舟の際の水先のあやまりでございましたか……」
「とにかくあの島へ舟を着けてみるぜ、いいかい、弁信さん」

三十六

しかしながら、これは米友の眼の誤りでないことは勿論、

弁信の勘の間違いでもなかったのです。

竹生島を南へ三里余の湖上に、竹島というのがある。一名多景島ともいう。そこへ二人は小舟を着けたのです。悲しいかな、能弁博学の弁信法師も、竹生島あることを知って、竹島あることを知りませんでした。米友に至っては、巧者ぶった弁信の鼻っぱしを少々へし折ってやった気持で、揚々として舟を沿岸の一角につけてみました。

そうして置いて、弁信を舟から助け出したのですが、その時に弁信は、もう座前へ置いた琵琶を頭高に背負いこんで、杖をつき立てていました。

米友が案内に立って、この岩角の一方に路を求めつつ島の表口へ出ようとしたが、篠竹が夥しく生えていて道らしい道がないので、押分け押分け案内をつとめ、ようやく小高い一角へ出ると、そこで早くも弁信のお喋りが展開されてしまいました。

「米友さん――やっぱり違いました、この島は竹生島ではございません」

「ぢゃあ、何という島だ」

「何という島だか、わたくしは聞いてまいりませんでしたが、たしかに違います、竹生島と申しまする島は、金輪際から浮き出た島でございまして、東西南北二十余町と承りましたが、この島はそれほど大きい島ではございません」

「はーてな」

「これは何という島か存じませんが、ずっと小さな島です、多分人間は住んでおりますまい。ともかく高いところまで登りつめてごらんなさい、そうすれば必ず四方見晴しにきまっております、そこで、あなたの眼でよく見定めていただきましょう、竹生島は、あちらの方へさほど遠からぬところに見えなければならないはずでございます、南の方は陸つづき、多分、彦根のお城の方になりましょう、あなたの目でよく見届けていただきます」

「よし来た」

米友は、心得て弁信を案内し、道なき岩道をのぼりかけたが、竹が多いし、大木もある、その木の上に真黒い鳥が夥しくいる。巌の下の淵をのぞくと、また夥しい美鳥がいる。

「下のは鴨、上の真黒いのは何だい、烏ぢゃねえ、鵜だ、鵜だ――畜生、逃げやがらねえ」

と、岩角で地団駄を踏んでみて舌を捲いたのは、この夥しい鳥が、ちょっとやそっと威してみたところで、お感じのないことです。

「畜生、畜生――」

米友が、ムキになって鳥を追うものですから、弁信が、

「米友さん――鳥が驚かないのが人の住まない証拠です、島が小さくて、畑を作るべき土地も、面積もないから、人が住まないのです」

斯様に弁信が断定を下しながら、米友を先に立てて行くうちに、米友がまたも叫び出しました、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com